

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02302

研究課題名(和文)「日本」を語るオリエンタリズムの誕生と近代日本における「民話」の創出

研究課題名(英文)Orientalism and the invention of Minwa or the colloquial style of storytelling of Japanese folktales

研究代表者

遠田 勝 (Toda, Masaru)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60148484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ラフカディオ・ハーンを代表とする、明治期の英米系ジャパノロジストによって英語で書かれた日本の童話・伝説などが、欧米ではオリエンタリズムの枠内での「異文化情報」や「異国情緒」として「消費」されてしまったのに対して、日本では、それらが「規範的」な英語教科書や翻訳によって読まれたために、「伝統的」語りより上位におかれ、その西洋のナラティブの特徴と、オリエンタリズムに由来する異国情緒が、地方の古い物語をいかに「現代」に蘇らせるかに腐心していた日本の民話・伝承の語り手たちに強い影響をおよぼし、近代日本の新たな伝統的物語の様式である「民話」の「語り」の創出に関与していたことを証明した。

研究成果の概要(英文)：In the Meiji era, some American and English writers such as Lafcadio Hearn and Basil Hall Chamberlain took a deep interest in Japanese myths, legends, and folktales. They not only studied them, but also rewrote them for the English readers. With their simple, readable style and colorful Orientalism, those “improved” English versions impressed Japanese writers and storytellers who were also trying to modernize the traditional Japanese stories for the young readers.

With an increasing academic and popular interest in the oral traditions, their endeavors prepared the invention of “minwa” or the new colloquial style of storytelling of Japanese folktales.

研究分野：比較文学・比較文化

キーワード：小泉八雲 ラフカディオ・ハーン 民話

1. 研究開始当初の背景

日本における近代的「民話」は、その研究が民俗学や文学、昔話研究など多分野にまたがるために、口承とされる、その個々の物語の語り口や素材・出典がどのように誕生したのか、個別的・文献学的に実証されることが少なかった。そのため、具体的な論証が不十分なまま、地方の村落共同体において遠い昔から口承により伝えられてきた物語であろうと推定されがちで、その間の伝承と変容、とりわけ、語り口や主題、そしてメディアの変遷が学術的な研究対象となることがきわめてまれであった。

2. 研究の目的

本研究は、ラフカディオ・ハーンを代表とする、明治期の英米系ジャパノロジストによって英語で書かれた日本の童話・伝説などが、欧米ではオリエンタリズムの枠内での「異文化情報」や「異国情緒」「観光土産」として「消費」されてしまったのに対して、日本では、それらが「規範的」な英語教科書や翻訳によって読まれたために、「伝統的」語りよりも上位におかれ、リアリズムとサスペンスを基調とする近代西洋のナラティブの特徴や、その娯楽本位に単純化されたストーリーおよびオリエンタリズムに由来する異国情緒等が、「辺鄙な地方」に埋もれた「旧時代の物語」をいかに「現代の中央」に蘇らせるかに腐心していた日本の民話・伝承の語り手たちに強い影響をおよぼし、近代日本の新たな伝統的物語の様式である「民話」の「語り」の創出に参与していたことを具体的な作品の影響関係の実証によって証明しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、文献学的な実証により、民話・伝説・説話等の相互の歴史的・通時的影響関係を口承・書承の区別なく系統的に立証することである。そのために個々の民話と素材について、できるかぎり多数の文献資料を収集し、相互に比較検討し、考察することを主な研究方法とする。

4. 研究成果

研究成果としては、平成27年度に遠田勝「百物語・民話・近代小説 ハーンと民俗説話の変容」平成27(2015)年11月、神戸大学近代発行会「近代」第113号(p1-17)を発表した。この論文においては、ハーンの「破られた約束」と、その原話(妻セツの語った出雲の伝説)と近い関係にあったと推定される二つの物語、つまり『淞北夜譚』の「妬鬼」と『諸国百物語』の「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」を比較することによって、狭義の出典考証に加えて、ハーンと日本の民俗説話の伝統との関係をより深く幅広い視野から考えるために、江戸時代の怪談とりわけ『諸国百物語』の中の「後妻打

ち」説話、あるいはそれに類似した物語群全般と比較したとき、ハーンの再話にどのような特徴が指摘できるのかを考察し、以下のような結論を得た。すなわち、ハーンの「破られた約束」は、原話とその周辺の多くの類話を背景にして眺めたとき、これまでハーン研究者のあいだでやかましく指摘されてきたような病的な「残虐性」はもっていない。むしろ、江戸時代に娯楽として出版された怪談本がもつ、これ見よがしの猟奇性は、大幅に抑制されている。こうした抑制的操作を行ったのは、ハーンにこの物語を伝えた小泉セツや『淞北夜譚』の著者信太淞北にゆかりある松江の人々であったと推定される。口承は時に書承の悪しき発育を矯正するのである。ハーンはその口承化された民話をふたたび書物の芸術世界に引き戻したのだが、その際だった恐怖の生理的再現でもってハーンが描こうとしたのは、この物語の本質、つまり裏切られた前妻の恨みと怒りであって、その意味でハーンは出雲での口承民話化の方向を引き継ぎ、過度に娯楽化された物語をふたたび正統的な後妻打ち説話に引き戻したともいえる。このように『諸国百物語』での後妻打ち説話の展開を背景に「破られた約束」の成立過程を考えると、説話の伝承というものが、「口承から書承へ」という単純な一方通行ではなく、もっと柔軟複雑なものであることもわかる。なお、「破られた約束」において特徴的な作品の最後に語り手と書き手が登場し、感想を語り合い、怨霊への恐怖を同情へと転換させるロマンティックアイロニー的な技法については、ハーンを経由しての日本への移入について確実な例が見つからず、実証できなかった。今後の課題として引き続き探索をつづけたい。

平成28年度は、主にハーンによる日本の物語の英訳や翻案を通じて、日本で広く知られるようになった物語を研究の対象として、具体的に、ハーンの「貉」がいかにして日本の民話に影響を及ぼし、ノッペラボウ物語として地方の口承伝説として流布していったかを考証した。

その成果として、「ラフカディオ・ハーン「貉」とノッペラボウ物語の誕生 「日本」を語るオリエンタリズムと近代日本における「民話」の誕生」(『近代』、115号、2016年12月、19~39ページ)を論文として発表した。

この論文において指摘したのは、ハーンの「貉」における「再度の怪」という話型と美しい娘姿のノッペラボウの組み合わせは、ハーンの独創であって、日本の文献や口承の物語からそのまま由来するものではないことである。とりわけ、従来、一部研究者が指摘したような『老媪茶話』以前に存在したと仮定される朱の盤の物語から影響を受けたとは考えにくいこと、また、同様に、南方熊楠が主張するような『兼山記』の久々利山麓の妖怪譚の焼き直しとは考えられないことを

論証した。

あわせて『兼山記』の久々利山麓の妖怪譚の成立についても考証をおこない、この物語における、ハーンの「貉」に類似した、再度の怪とノッペラボウの組み合わせは、ハーンとは別系統で独自に成立したもので、『曾呂利物語』の「をんじゃくの事」(巻の三の六)と同じ物語集の「御池町の化け物のこと」(巻の四の二)を組み合わせることから誕生したのではないかと推定した。

これら考証に、近代日本におけるハーンの「貉」の圧倒的な人気と流布を考えあわせると、ひとつの仮説を導き出すことができる。それはつまり、民俗学の誕生以後に各地で口承の民話・伝説として採録された多くのノッペラボウ民話のうち、再度の怪の話型をもつものは、ハーンの「貉」に直接、由来しているのではないかという仮説である。

また講演として、富山大学ヘルン研究会主催・2016年度第1回講演会(2016年9月29日、於富山大学)において、「小泉八雲と日本の民話 口承と書承の不思議な交流」と題して、上記研究成果に加えて、いくつかの事例を追加して、ハーンの怪談の成立過程における口承話との交流、また、ハーンの怪談が翻訳を介して、日本の地方の口承民話に影響をあたえた事例を発表した。

つづいて、日本比較文学会関西支部、第52回関西大会(2016年11月12日、於甲南大学)において「シンポジウム ハーン研究の新展開～ヘルン文庫の活用法～」に参加し、富山大学ヘルン文庫における調査結果を発表し、ハーンの「怪談」研究における、ヘルン文庫の重要性およびその利用方法、調査方法についての提案、およびハーンの怪談の口承民話化と民話化を経ての日本の地方における伝説化の事例を報告した。

平成29年度は、前年度、過去の諸説を否定して導き出した仮説、つまり、日本の近代以降に広く流布したノッペラボウ民話は、日本古来の伝承ではなく、ハーンの「貉」から派生したのではないかという仮説を検証するために、ハーンの「貉」出版以降の日本のノッペラボウの民話・伝説を可能なかぎり、網羅的に収集・分類し、その考証の成果を共著である神戸大学英米文学会編『教養主義の残照「コウベ・ミセラニ」終刊記念論集』のなかの「近代日本における『民話』の誕生 ラフカディオ・ハーン『貉』以後のノッペラボウ物語を中心に」(p171-194)(2018年3月、開文社出版)に発表した。

ハーンの「貉」から派生したと論証できる日本の口承民話として、まず取り上げたのは、津軽の妖怪「ずんべら坊」である。この物語のもっとも有力な出典は、児童文学作家で日本の伝説昔話の研究者の巖谷小波が一九三五(昭和一〇)年に全十巻で刊行した『大語園』である。さらに『大語園』が依拠した原典までさかのぼると、ノッペラボウの顔が「卵」のようなと形容されていること

から、ハーンの「貉」の影響が認められることが確認できた。ノッペラボウの顔を卵のようなと形容するのは、ハーン固有の表現であると考えられるからである。

同様の根拠から、昭和四七年刊行の『徳之島の昔話』に収録されている「卵顔」という話も、ハーンの「貉」に由来すると考えられる。この「卵顔」という話には、ハーンの「貉」からの影響の痕跡がもうひとつ残っている。それは、二度目と三度目のノッペラボウの出現が「自分の顔を手でなでると、たちまちにしてその人も、目も口も鼻もない卵顔の人にかわってしまった」とあり、顔を手でなでる仕草によって容貌が変化しているように描かれていることである。この手の仕草によってノッペラボウが出現するという描写も、日本における伝統的なノッペラボウ理解、あるいは描写には存在しない、ハーンの「貉」固有の表現なのである。ハーンと近代日本において採話された口承民話の影響関係は、実証は不可能で、物語の内容のたまかな類似と採話と出版の年代から推測するしかないと考えられてきたが、こうしたハーン固有の表現や創造性をマーカーとして注目することで、文献学的にも充分、実証可能なのである。

ハーンの「貉」と日本の口承民話の関係で、もうひとつ考証しなければならない問題がある。それは、しばしばハーンの「貉」の原拠かもしれない指摘されてきた熊本の「重箱婆」の伝説である。これは、荒木精之編『肥後の民話』(未来社、一九六〇年)に収録されている話だが、熊本は、ハーンがかつて住んでいた土地でもあり、また、話の内容が典型的な再度の怪にノッペラボウを組み合わせた、ハーンの「貉」型の話であることから、その可能性が言及されてきたのである。口承民話について、その成立時期の考証を放棄し、その成立年代を採話・出版の時期よりも大幅に古く見積もるのは、柳田民俗学の影響を受けた文学研究のよくない癖であり、このケースでも、この民俗学的なバイアスが影響しているのではないかと思われる。文献学的に考えて、ハーンの「貉」と熊本の「重箱婆」の話型の一致と、両社の成立・採話時期の大きなずれを考え合わせると、「重箱婆」が「貉」のもととなったと考えるよりも、その逆の影響関係を想定したほうが合理的に思われる。すなわち、「重箱婆」の伝説は「貉」の影響から生まれたと考えられるのだが、ただし、「重箱婆」には「貉」からの影響だけでは説明できない古い伝承の痕跡があることも否定できない。この二点を矛盾なく説明するためには、「重箱婆」は、もともとは朱の盤の物語の系統にあった鬼面の老婆の怪談であったのが、近代になって流布したハーンの「貉」の翻訳からの影響で、古い鬼面の怪談が近代的なノッペラボウの怪談に変更されたと考えるのがよいのではないかと提案

した。

最後に『日本昔話通観』によりながら、話にノッペラボウは登場するものの、再度の怪の話型には属さず、したがってハーンの「貉」に由来しないと考えられる、四話の民話を検討した。その結論をいえば、いずれも物語としては形をなしておらず、こちらではノッペラボウは、断片的な怪異の形容・描写ひとつとしてしか使われていないとを指摘した。結局、ノッペラボウは、ハーンの「貉」の物語を得てはじめて日本の伝説・昔話の代表的な妖怪としての地位を得たのである。

「貉」の成立過程、そしてその後の口承民話としての流布、さらにその後の絵本、童話、テレビ・アニメなどによるアダプテーションを経ての日本の伝統的物語としての規範的地位の確立まで考えると、ハーンの創作の驚くべき点がもうひとつ浮き彫りになる。

それは「貉」に代表される、ハーンが創造した「日本」の「伝統的」物語は、民間に伝わり、土着の「口承」民話として語りなおされるうちに、当然ながら、もとの洗練された世紀末文学としての芸術性を失っていくにもかかわらず、口承民話として独自の生命と形式を獲得した、それら民話は、各地に伝播し発達しつづけていったことである。昔話や民話を「創作」した近代作家は、数え切れないほど多く存在するが、そうして「近代的な文学・芸術作品」として書かれた物語が、民話として土着化し、無数にその数を増殖させていくという例を、わたしはハーン以外に見たことがない。ハーンがこうした短い怪談にそそぎこんだものが、世紀末の英語作家としての洗練された芸術性だけでなく、フォークロアとしての根源的な生命力であったことにもっと注意を向けるべきであるというのが本論のもうひとつの結論である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 遠田勝「ラフカディオ・ハーン「貉」とノッペラボウ物語の誕生 「日本」を語るオリエンタリズムと近代日本における「民話」の誕生」(『近代』、115号、2016年12月、19~39ページ) 査読無し。

2. 遠田勝「百物語・民話・近代小説 ハーンと民俗説話の変容」平成27(2015)年11月、神戸大学近代発行会「近代」第113号(p1-17) 査読無し。

〔学会発表〕(計2件)

1. 遠田勝「シンポジウム ハーン研究の新展開～ヘルン文庫の活用法～」日本比較文学会関西支部、第52回関西大会(2016年11月

12日、於兵庫県甲南大学)

2. 遠田勝「小泉八雲と日本の民話 口承と書承の不思議な交流」富山大学ヘルン研究会主催 2016年度第1回講演会(2016年9月29日、於富山県富山大学)

〔図書〕(計1件)

1. 神戸大学英米文学会編『教養主義の残照 「コウベ・ミセラニ」終刊記念論集』遠田勝「近代日本における『民話』の誕生 ラフカディオ・ハーン『貉』以後のノッペラボウ物語を中心に」(全294ページ、担当ページp171-194) (2018年3月、開文社出版)

6. 研究組織

(1)研究代表者

遠田 勝(Toda, Masaru)

神戸大学・大学院・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60148484